

静岡大学静岡キャンパス国際交流ラウンジにおける
実践報告：ピア・サポート活動に焦点をあてて

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学大学教育センター 公開日: 2024-04-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 濤岡, 優 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/0002000521

静岡大学静岡キャンパス国際交流ラウンジにおける実践報告

ピア・サポート活動に焦点をあてて

濤岡 優 (静岡大学 国際連携推進機構)

要約: 本報告書では、静岡キャンパス国際交流ラウンジにおける活動実践の整理・検討を目的とした。国際交流ラウンジは、これまで静岡大学内における国際化促進の拠点として学生の多文化理解や語学力の向上といった取り組みを進めてきた。本報告書では、特に学生同士のつながりの構築や相互的な交流・サポートの促進を目的としたピア・サポート活動に焦点をあてて実践の報告をおこなった。国際交流ラウンジでは主に2つのピア・サポートの母体があり、1つは静大バディ（同じ専門や学科、あるいは同じ関心や趣味をもつ留学生と日本人学生がペアやグループを組み交流するコミュニティ）、もう1つはラウンジボランティア（交流イベントの企画・実施等の活動を担う）であった。この2つのピア・サポート活動の立ち上げ時から現在に至るまでの実践内容をまとめ、活動に携わる学生からのフィードバックをもとに、活動の成果と課題、および今後の展望を提示した。

キーワード: ピア・サポート、国際交流、グローバル教育、居場所

1. はじめに

静岡大学の全学組織である国際連携推進機構では、学生の多文化理解や語学力の向上、さらに留学や国際交流活動への動機づけを促すことを目的として、2019年度に「国際交流ラウンジ」を静岡キャンパスに設置した。2020年のコロナパンデミックの影響により活動の停止、停滞を余儀なくされたが、海外からの学生の受け入れ、海外留学への派遣が再開されるに伴い国際交流ラウンジの活動も活発になり、2022年度には、新たに浜松キャンパスにラウンジが設置された。現在(2023年)は、国際教育プログラムや国際交流イベントを実施しつつ、グローバルな活動や取り組みに関心のある日本人学生と留学生をつなぐ拠点としてさらなる展開を試みている。

本稿では静岡キャンパスの国際交流ラウンジ(以下、ラウンジ)の取り組み、特にピア・サポート活動に焦点をあてて実践の報告をし、成果と課題を整理・検討する。

2. ピア・サポートについて

ピア・サポートは、仲間を意味する peer と支援を意味する support を組み合わせた言葉で、教育の

文脈では、「教職員の指導・援助のもとに、学生たちの相互の人間関係を豊かにするための学習の場を各学校の実態に応じて設定し、そこで得た知識やスキル(技術)をもとに、仲間を思いやり、支える実践活動」(中野他, 2008)、「学生生活上で支援(援助)を必要としている学生に対し、仲間である学生同士で気軽に相談に応じ、手助けを行う制度」(日本学生支援機構, 2020)といった定義がされる。すなわち、同じ立場をもつ者同士が、相互的に助け合う支援/関係のあり方をさす。

ピア・サポートの発端は、1990年代のアメリカ、ニューヨークにおける非行少年に対する仲間支援にあり、同世代の友人が非行少年を支えつつ自分自身も成長するボランティア運動として始まった(西山・山本, 2002; 大石・木戸・林・稲永, 2007)。ピア・サポート自体は、福祉や医療などさまざまな領域で取入れられているが、教育現場では、学習支援や新入生の学校適応を主目的とした“Student Advising”として導入された。その後、“Peer Counseling”としてさらに広がりを見せるも、専門性をもつカウンセラーとの役割の混同を避けるために、Peer Helping という名称が用いられるようになり、1990年代のアメリカでは Peer Helping, 一方

カナダ・ヨーロッパでは、Peer Support として定着するようになった（西山・山本，2002）。日本の大学教育でいち早くピア・サポートを導入したのは、広島大学の“ピア・サポート・ルーム”であり、その後急速に各大学での導入が進んでいる（山田，2010）。日本学生支援機構の調査結果によると、2021年度の時点でピア・サポートを実施しているのは、大学全体で49.6%、国立大学だけで見ると91.9%となっており（日本学生支援機構，2023）、多くの大学で取り組まれていることがわかる。

さらに、大学のグローバル化が進み、外国人留学生の受け入れが拡大する中、留学生の個別のニーズに対応するため、ピア・サポートを導入する大学もあり、その例として北海道大学のサポートデスク（青木・高橋，2009；奇・石井，2013）、筑波大学のピアサポートデスク：Ask Us Desk（鈴木・舟木，2016）、東北大学のヘルプ・デスク（渡部・新美・末松・渡邊，2021）などが挙げられる。一方で、留学生への支援を対象としたピア・サポートは留学生の日常生活の困難にアプローチできるだけでなく、日本人学生と留学生との交流の場や友人関係構築の契機となること、さらにイベントの企画・運営といった共同作業の中で、異なる言語背景をもつ学生同士でのコミュニケーションが促され、グローバル人材育成の場ともなりうることが指摘される（八若，2014；鈴木・舟木，2016）。本学のラウンジにおけるピア・サポート活動も、留学生支援をその活動の範囲に含めつつ、日本人学生と留学生を対等な立場として扱い相互交流の促進に重きを置くものであり、その交流を介したグローバル人材の育成、あるいは多文化共生教育の提供を目指している。以下、実際のラウンジの様子を写真で簡単に紹介する。



図1. ラウンジの部屋の様子



図2. ラウンジの入り口の様子

3. 国際交流ラウンジにおけるピア・サポート実践

静岡キャンパスラウンジには、主に2つのピア・サポートの母体があり、1つは静大バディ、もう1つはラウンジボランティアである。次節以降ではこの2つのピア・サポート活動を中心に、立ち上げの経緯や、現在に至るまでの実践の内容をまとめ、活動に携わる学生からのフィードバックを示しつつ、実践の成果と課題および今後の展望を提示する。

3.1. 静大バディ

3.1.1. 概要

静大バディは、2021年の12月から始めた取り組みで、同じ専門や学科、あるいは同じ関心や趣味をもつ留学生と日本人学生がペアやグループを組み、それぞれで自由に活動し交流するコミュニティである。学内で実施される留学生へのサポートとして、チューター制度がある。この制度は、1人の留学生に1人の日本人学生がチューターとしてつき、留学生が渡日した際に必要な日常生活・学生生活における手続き等の支援を目的としたものである。静大バディは、このチューター制度とは異なるものとして位置づけており、横並びの関係、かつ小規模での交流や相互的なサポートを目的とする、ボランティアをベースにした活動である。また、静大バディの運営を担う学生スタッフも育成しており、ペア・グループの組み合わせ決めや、各バディの調整、相談役を担っている。そのほかにも、バディ同士が交流できる機会としてのイベントの実施や、留学生が主催・企画するイベント開催のサポート、

お昼の時間帯にご飯を食べながら交流を広げる機会としてのラウンジ・ランチ（週 2 回）なども担当する。現在は、5 人の学生スタッフが運営を担っており、そのうち 2 名は後に言及する ABP に所属する留学生である。

3.1.2. 静大バディ設立の目的

静大バディを開始した当初の目的は、本学で実施するアジアブリッジプログラム（以下 ABP）の学士過程に在籍する学生のサポートであった。ABP は、アジア諸国の学生を対象とした 4 年間のプログラムで、半年間の日本語教育を含めた基礎教育を受けたあと、各学部にも所属し学位取得を目指すものである。学士生は渡日前から職員による手厚いサポートがあり、また選抜の段階である程度の日本語能力が求められているため、チューター制度の対象になっていない。一方で、入学して半年間は ABP 学生だけで基礎教育を受けるため、日本人学生と接する機会がほとんどなく、学部にも所属した後も、授業についていくことに難しさを感じる学生もいる。このような状況を鑑みて、ABP 学生と日本人学生の繋がりを作る必要があると判断し、静大バディの導入を試みた。

上述した経緯から、当初は ABP 学生のみを対象にしていたが、2022 年 4 月にバディの募集を募ったところ、50 人近くの日本人学生が説明会に参加し、留学生とバディを組むことを希望した。そこで、留学生側の対象範囲を広げ短期留学生や私費留学生からもバディ希望者を募り、結果として全体で 100 名程度の学生が参加することになり、今年度も新規に 50 名程度の学生が参加している。

3.1.3. バディシステムについて

本学で実施する静大バディは、愛知県高浜市で取り組まれているバディシステムの枠組みを参考にしている。高浜市は、愛知県の中でも外国人住民の割合が高い地域である一方、外国人住民と地域住民の関係の希薄さが課題としてあった。そこで、外国籍の住民を含め、子どもから高齢者まで多様な背景をもつ人々の地域における交流促進を図るために、ベルギーのメヘレン市で取り組まれている移民の受け体制をモデルにバディシステムを構築した（厚生労働省、2023）。高浜市で実施される

バディシステムは「一方的なサポートではなく、双方向、多方向の関係」とされている。すなわち、外国人住民をサポートの受け手として位置づけるのではなく、地域住民がサポートしつつも外国人住民の側でも自分の持っているものを提供する、相互的な関係としている。このような関係のあり方を目指すバディシステムは、本学における留学生と日本人学生の交流のあり方として好適と考え、これをモデルに静大バディの実施方法を学生スタッフと模索しながら構築し、現在に至る。

3.1.4. バディの組み方

バディを組むにあたって、以下のような手順をふんでいる。まず、学期ごとにバディの説明会を実施し、バディへの参加を希望する学生にはアンケートへの回答を求める。そのアンケートでは、バディに参加した目的、関心があることや趣味、どのような人とバディを組みたいか（同じ学部の人など）、希望する形態（ペア、グループ）といったいくつかの質問を聞き、その回答をもとにバディの組み合わせを決める。その後、組み合わせを通知し、お互いに連絡を取り合いながらバディごとに活動を進めていく。連絡が取れない等の問題があった場合には、学生スタッフが間に入りサポートを行う。

また前述したように、自分のバディ以外の学生とも繋がることできるように、バディ全体、またバディに参加していない留学生や日本人学生も含めて交流する機会としてのイベントを、月に 2 回開催している。

3.2. ラウンジボランティア

3.2.1. 概要

ラウンジボランティアは、国際交流や多文化交流に関心のある学生を対象に募集を募るボランティアコミュニティで、ラウンジを拠点に学内における学生間の国際交流を活発にし、繋がりを広げるための活動を担っている。この取り組みを開始した経緯は、もともとラウンジは、イベントやプログラムを開催するときのみ開放しそれ以外の時間は閉室していたが、ラウンジを利用する学生が増え交流が活発化するに伴い、イベントの後やイベント開催時以外も気軽に集まり自由に交流する場の需要が高まり、学生からも常時ラウンジを開放

してほしい、という要望が直接寄せられるようになった。この要望に応えるため、ラウンジに待機し対応する学生が必要となり、2022年の10月にラウンジボランティアサポーター（以下、サポーター）を新規に募集した。その後も半年ごとにサポーターを募りながら、徐々に活動の幅を広げてきた。2022年度後期の段階では16名（内留学生2名）、2023年度後期には、37名（内留学生7名）が参加しており、学部生1、2年生が活動の主軸になっている。

サポーターの活動は、教員・職員から仕事を依頼するのではなく、サポーターを担う学生の主体性を軸にして展開されることを重視している。また、サポーターとして多様な関わり方ができるように、参加の頻度や程度もそれぞれの学生の判断に任せ、可能な範囲で活動することを基本のやり方としている。

くわえて、サポーターの取り組みの様子を教員側が把握するため、また学生自身が自らの関わり方を振り返る機会として、学期終わり毎に学生にリフレクションアンケートを実施している。具体的には、半年間の活動の振り返りや成長した点・改善が必要な点、次期のボランティア継続の意思、今後の目標、といった質問に回答してもらい、必要に応じて教員側からフィードバックやサポートを行っている。

表1. サポーターの人数

※（ ）内は留学生の人数

	2022年度	2023年度
1年	12 (1)	19 (2)
2年	2 (1)	12 (4)
3年	0	4 (1)
4年	1	1
その他	1	1
計	16 (2)	37 (7)

3.2.2. 活動の内容

現在サポーターが取り組んでいる活動は、大きくわけて5つある。具体的には、1) ラウンジに初めてきた学生への対応やラウンジで実施するイベント・プログラム等の案内（シフト制）、2) イベントの開催、3) 留学生の生活・学習サポート、4)

podcast ラジオ配信、5) 言語・文化交流カフェである。1) ラウンジでの対応以外の活動は、グループを作り月毎にリーダーを立てて、それぞれで活動を進めており、中には複数の活動に参加している学生もいる。

月に1回はサポーター全員で集まり、担当教員がファシリテーションを担いながら、ラウンジの様子やグループごとの活動状況を共有する時間を持っている。他のグループが課題を抱えている場合には、学生間でアドバイスも行う。また、ミーティングの冒頭に、担当教員から居場所づくりやリーダーシップといった話題を提供し、サポーター同士で話す時間を作ることで、サポーターが自分たちの活動の目的や動機、活動への関わり方を振り返り、相互的な成長が促されるような働きかけをすることもある。

本ミーティングには、静大バディの運営を担う学生スタッフも参加するようにし、学生スタッフとサポーターが連携し情報共有しながらラウンジ全体での活動に取り組めるようにしている。また、授業や課外活動等でミーティングに参加できない学生もいるため、ミーティングの議事録を共有しつつ、シフトで一緒になった他のサポーターから情報を補足するようにしている。

以下にサポーターが実施する5つの活動を具体的に紹介する。

1) ラウンジでの対応・案内

授業の入っていない時間帯にサポーターがシフト制でラウンジに待機し、ラウンジに新しく来た学生にラウンジの取り組みや開催予定のイベント等を案内したり、他のラウンジ利用者と繋げる役割を担っている。授業の時間にあわせて1シフト=90分を基本とし、1-5人ほどの人数の学生が入る。一方、サポーターへの参加がきっかけでラウンジを利用するようになる学生も少なくない。そのような学生にとってはラウンジで待機する時間は、ラウンジを長く利用している学生や、他のサポーターと知り合う機会にもなっている。

2) イベントの実施

ラウンジでは、学生スタッフが企画するイベン

トの他に、サポーター企画のイベントも不定期で開催している。特に、イベントの内容はサポーターの特技や関心のあることを活かしつつ、国際交流に繋がるような企画にすることを重視している。これまでに実施された企画のいくつかを例としてあげると、以下のようなものがある。

【日・中・韓 書道ラウンジ】



書道が得意な学生たちが企画した、日本、中国、韓国の書の書き方の違いや、恋文の表現の違いを教わりながら、書道を楽しむイベント。

図 3. 書道ラウンジ イベントポスター

【KOREAN DAY : 韓国の伝統遊び体験】



韓国出身の学生たちが企画した、現代の K-pop を聴きながら、韓国の伝統的な遊びを体験するイベント。

図 4. KOREAN DAY イベントポスター



【ドキドキラウンジ】

学生たちの恋愛に関する質問や悩みを事前に匿名で募集し、イベント当日に共有しながら考えを伝え合い、国や文化による恋愛の価値観や親密な関係の築き方の違いを楽しむイベント。

図 5. ドキドキラウンジ イベントポスター

イベント実施の手順・流れは、イベントを実施したい学生がサポーター全体に企画案を共有して協

力を呼びかける。そこでチームを作りポスターの作成・広報も含めて準備を進める。イベントは、企画できる余裕があるときに実施するという方法をとっているため、開催の頻度は不定期であるが、企画学生がもつ強みを活かした内容になっているため、内容はユニークなものが多く、ラウンジを利用したことがない学生も、テーマに関心をもってイベントに参加する場合もある。

3) 留学生サポートラウンジ : 留学生の生活・学習サポート

留学生サポートラウンジでは、本学に在籍する留学生の生活や学習全般のサポート活動を担っている。現在は 10 名弱の学生が参加していて、週に 2 回ラウンジで待機し、留学生からの質問等に対応している。運営の方針については、本学で日本語授業を担当する教員とも相談して決定した。特に留意している点として、成績評価に関連する授業の課題等については、サポーターは関与せず、授業担当教員に直接質問するよう促すといった対応をとっている。サポートラウンジは、今年度から始めた取り組みであり、留学生の利用率は高くない。この状況を改善するため、担当するサポーターは、留学生が何に困っているのかを把握するための調査の実施や、アンケートボックスの設置等を検討し、アプローチの方法を模索している。

4) ラウンジラジオ ゆるらじ! : podcast 配信

Podcast は、ラウンジの普段の様子や開催予定のイベントを告知したり、ラウンジ利用者やリスナーからの質問等に答えるといった、遠隔での国際交流を目的とした取り組みである。また、本学での留学を終えた留学生が母国に帰国した後、本学の学生と交流を続けることができる機会の提供も 1 つの目的としている。現在は、5 名程度の学生で担当しており、配信の構成や脚本の作成、録音や編集、ジングル（ラジオの開始時などに挿入される短い音源・音楽）の作成など、全ての工程を担っている。録音した内容は担当教員数名で確認し、個人情報や内容の是非等に関する助言をしている。

5) Café Lingua 世界の言葉カフェ : 言語・文化交流カフェ

毎回異なる国のブースを作り、その国の文化や伝統、言葉、料理、観光地など、さまざまなテーマで広く緩やかに交流する機会として月に1回程度開催している。具体的なやり方としては、本学の留学生に担当を依頼して毎回2-3つのブースを作り、1時間程度の間それぞれのブースごとに交流する。これまで、韓国、中国、ブラジル、チェコ、ウクライナ、ベトナム、タイ、フランス、ブルガリアのブースを設置してきた。この取り組みの目的の1つとして、留学生がイベントを企画する機会の提供がある。ほとんどの留学生は半期から1年の滞在であり、イベント等も参加する側として、受け身の立場に留まることが多い。また、ラウンジの主な使用言語が日本語であることもあり、日本語で会話することに自信がない留学生は、日本人学生との交流のきっかけを持つこと自体が難しい場合もある。そこで、留学生自身が自分の出身の国や地域について紹介し情報を発信・共有する側になることが、交流のきっかけづくりになると考え、本企画を開始した。各ブースでの進め方は、担当する留学生に任せており、母語での基本的な挨拶の紹介、言語の発音練習、観光地の紹介、母国のお茶のテイastingといったトピックで自由に交流をしている様子が見られる。

3.3. 学生スタッフ・サポーター研修

ラウンジにおける活動の幅が広がり、利用する人数も増えるにつれて、改善すべき点や課題、また利用者からの要望が出るようになったが、それらに対しての解決策や新しいアイデアを出すことに行き詰まる場面、あるいは学生スタッフやサポーターが自分たちの活動状況を客観的に評価することが困難な場面が見られるようになった。そこで、昨年度末に、静大バディに参加する学生や学生スタッフ、サポーターを主な対象とした研修を企画し、多文化共生に関する知識やグローバルな視点を深め、学生による学内・学外での国際交流活動を後押しするためのワークショップを行った。講師として、前述したバディシステムの実施を高浜市で担う公益財団法人トレイディングケア代表の新美純子さんをお招きし、地域での多文化共生の現状や町全体での取り組みを紹介していただきつつ、多文化共生の促進を目的としたプロジェク

ト案作成・発表のワークをリードしていただいた。本研修には20名程度の学生が参加し、地域が抱える具体的な課題やそれを解決するための実践的取り組みを学ぶ機会となった。また、学生が身近に感じている多文化共生に関する課題を出発点に、それぞれのプロジェクトを考えるワークを通して、学生が大学の外に視点を広げ、地域全体での交流促進に関心を向ける契機となり、ひるがえして学内における国際交流拠点としてのラウンジ活動を今後どのように進めて行くべきか考えるきっかけになっている様子だった。

4. 活動に参加する学生の感想

実際にラウンジの活動に関わる学生たちは、どのような動機を持って参加し、また活動する中でどのような経験を得ているのだろうか。以下に、ボランティアサポーター説明会の申し込みフォームで記載を求めたボランティアに関心をもちた理由（2022、2023年度）と、今年度後期のラウンジ活動を開始する前に実施したリフレクションアンケートの回答（2023年度）の一部を紹介する。なお、【ボランティアに関心をもちた理由・動機】以外の項目には、学生スタッフの回答も含まれる。

【ボランティアに関心をもちた理由・動機】

- ・国際交流ラウンジのイベントに何度も参加させてもらって、その活動の手伝いをしたいと思ったから。
- ・様々な方と交流してみたいと考えているから。私はコミュニケーションをあまり上手く出来る自信がないため、積極的に行動してみたいと考えたから。
- ・留学生サークルの活動に参加していくうちに、国際交流に関心をもちました。またラウンジに顔を出した時に、笑顔で迎えてくれる方々のように自分もなりたいたいと思ったからです。
- ・今後英語を主に学んでいきたいと思っており、留学生の方と交流を深めることによって得られるものがあると思ったからです。
- ・留学生の方と関わってみたいと思っていたため、ラウンジボランティアに関心をもちました。

以上から、留学生や他の学生との交流、英語での

言語交流といったことを目的に参加した学生、またラウンジを利用する中で、運営や企画等を担うことに興味をもち、参加を希望した学生がいることがわかる。

【活動を通して成長したこと】

- ・ひとを繋げることと繋がりあえる楽しさを経験したこと。また、やりたいことでたくさんの人を動かせたという事実が自信となった。
- ・コミュニケーション能力、特に英語の面でとても成長できた。
- ・最初は留学生にも日本人学生にも人見知りしていたが、自分から積極的に話せるようになった。
- ・異なる文化を身近に感じ、より尊重できるようになった。
- ・留学生や日本人同士でも積極的に関わることによって交友関係が増えたことや、特に留学生から質問や助けを求められた際にどのように対応するのが良いか自分なりに考え実行できたこと。

以上から、自分自身が他の学生と繋がり、さらに関係をつなげる媒介役としての役割を果たせたこと、文化的背景の異なる人の立場や考え方を尊重できるようになったこと、さらに自分なりに留学生への支援の方法を模索しながら実行に移せたこと、といった点に学生たちは自らの成長を感じていることが伺える。

【今後改善したいこと・さらに頑張りたいこと】

- ・仕事の分担、人の使い方、頼りかたを覚えたい。企画に参加したくても講義で来られない人へのフォローなどに課題を感じる。
- ・ラウンジボランティアの一員として、ラウンジに関わる人、興味のある人にもっと楽しいと思ってもらえるような取り組みをしていきたい。
- ・会ったことのある人の名前と顔を早めに覚えて、挨拶ができるようになること。その人がラウンジに来やすくなる「知り合い」になること。
- ・ラウンジが主体となって行うイベントに積極的に参加したい。

以上から、今後はより積極的に活動に参加することや、ラウンジで出会った人との新たな関係性

を構築することを目標にしたいと考えている学生がいること、またイベントを企画するうえでの他のメンバーとの関わり方や、参加できない参加学生への配慮の仕方について課題を感じている学生がいることがわかる。

【今後、ラウンジをより良くしていくために、どのようなことが必要だと思うか】

- ・初めての人がラウンジに入りやすい雰囲気を作ること。学内のもっと多くの人にラウンジを知ってもらおうこと。
- ・だんだんとメンバーが固定化されているため、学内で活動をアピールする機会を増やすことが必要だと思う。
- ・ひとりがイベントを企画したり実施するメインになるのではなく、その担当がラウンジに参加している人全体に広まり、イベントを企画することで自ら発信する大変さとか達成感を味わえる場所として今後機能していくと、よりラウンジが自主的な場所になると思う。

ラウンジ全体の課題として、より多くの人に利用してもらえるような工夫や取り組みをしていく必要性、またイベントを企画する学生が一部の人に偏らずに、学生スタッフ・サポーター全体で意識の共有や仕事の役割の分担をしていく必要性が認識されていることがわかる。

以上にラウンジにおけるピア・サポート活動の具体的な内容や、参加する学生からのフィードバックをみてきたが、これらをふまえて、この取り組みの成果と課題について考察し、最後に今後の展望を示したい。

5. ラウンジ活動における成果

5.1. グローバル教育への足掛かり

静大バディやラウンジボランティアは、授業やプログラムとは異なり、拘束力が弱いいため、自分ができる範囲の中で参加することが可能な、学生同士の緩やかな繋がりを土台とする活動である。したがって、日本人学生にとっては参加するにあたっての敷居が低く、結果、所属や学年に関係なく広

い層の学生を対象に国際的なことに関心をもつきっかけの提供が可能となった。特に、日本人学生の中には、大人数の交流場面では、自分から積極的に関わることができず、留学生と繋がる機会をもつことができない学生もいる。そのような学生にとっては、バディとしてペアやグループという交流の枠組みが決められている方が関わりやすいようである。さらに、留学生と日常的に関わること、また一緒にイベント等に参加する、あるいは企画することが、言葉や表現、価値観、生活習慣の違いに触れる機会となり、日本人学生の関心が自ずと日本の外に広がっていくといった変化もみられた。結果、留学や海外研修、国際教育プログラムへの参加に踏み出す学生も少なくない。

このように、国際交流を介したピア・サポート活動は、グローバル教育のファーストステップ、あるいは、種まきの役割を担っているといえ、グローバル教育に関連する 1 つの成果としてあげられるだろう。

5.2. 個々の個性や関心を出発点にした国際交流

前述したように学生スタッフやサポーターは、イベントの企画、実施を担っている。企画の目的は国際交流に繋がるものである必要はあるが、具体的な内容は基本的に学生たち自身で意見を出し合い話し合う中で決定している。したがって、企画する学生が得意とすることやできることを生かしながら、企画を練り上げていくこととなり、一方ではその過程で自分たちの企画がどのように世界、あるいは国際的なことに繋がっていくのかを考える契機ともなる。すなわち、企画の出発点は自分自身がすでにもつ資源でありながら、企画化の過程で、グローバルな視点へと開かれていく経験となる。たとえば、すでに紹介したイベント「書道ラウンジ」は、書道を得意とする日本人学生が立案したが、他のサポーターに相談しつつ企画を詰める中で、そもそも韓国や中国は筆の持ち方が異なることや、文化によって愛情表現の違いがあることに気づき、最終的に 3 つの国における書道の違いを楽しむ企画としてできあがった。このように、学生が相互に関わりながら企画を組み立てる過程そのものが、世界へと視点が広がる過程として体験されている。

加えて教員が極力関わらず学生たちのペース・発想に任せることで、新規性のあるユニークなアイデアや企画が出ることが多い。教員の関与がない分、実現・実施までに時間がかかることが多々あるが、それでも学生の主体性を待ちそれに委ねることで、国際交流のあり方がより多様で魅力的なものになっているといえる。

このことから、国際交流を基盤とするピア・サポート活動は、学生の相互的関わりの中で主体性を伸ばしつつ、学生自身が持つ強みをグローバルな領域へと引き上げる役割を果たしているといえ、これもグローバル教育に関連する 1 つの成果といえるだろう。

5.3. 居場所としてのラウンジ

前述したように、サポーターがラウンジで待機・対応する仕組みができ、ラウンジを常時開放することが可能になった。その結果、イベントやプログラムのときだけではなく、授業の合間や昼休みなどに立ち寄り、ご飯を食べながら談笑する、課題に取り組む、留学生に言葉を教えてもらう、あるいは何も用事がなくても顔を出してみる、といった使い方や過ごし方がされるようになり、学生にとってのいわば居場所になりつつある。また、ラウンジは様々なバックグラウンドを持つ学生が利用する場であり、コミュニケーションの方法や人との距離の取り方も自ずと多様になる。そのような環境に居心地の良さを感じ、日本人学生同士のコミュニティには馴染めないが、留学生がいるコミュニティでは気軽に関わることができる、といったケースも見られるようになった。

このように、ラウンジが留学生、日本人学生双方にとっての 1 つの居場所としての機能を担うようになったことは、ピア・サポートの取り組みとして大きな成果と言えるだろう。

6. 今後の課題と展望

6.1. ラウンジの認知度の向上と利用者の拡大

コロナ禍による規制が緩和されるに伴ってラウンジの取り組みが活発化し、さらに常時開放が可能になったことで、ラウンジの存在が徐々に学生たちの間で定着しつつある。また学生スタッフや

サポーターの自主的な活動や活躍により、ラウンジで実施するイベント・プログラムもより一層充実し、多様な活動を展開することが可能になった。一方で、ラウンジを利用する学生が固定化している傾向があり、サポーター同士の関係に閉じたコミュニケーションになる場面もある。これは先に記載したように、サポーター自身もラウンジの抱える課題として認識している点であり、全体でのミーティングでも、度々課題としてあげられている。一方でこれは、学生スタッフやサポーターの関わり方に課題があるというよりも、ラウンジの部屋の狭さや、入り口の狭さといった物理的な要因が大きいと考えられる(図1, 2)。しかし、ラウンジを設置した目的は、全学での国際交流の促進を担う場所、また留学生と日本人学生が繋がる拠点として機能することであり、常に外に開かれた空間・関係である必要がある。今後はラウンジ以外の場所でイベントを実施するといった対応により、ラウンジのさらなる認知度の向上を図りつつ活動の拠点を広げ、より多くの学生が参加しやすい取り組みにしていくことが必要だろう。

6.2. 使用言語の多様化

現在ラウンジで学生たちが主に使用している言語は日本語である。本来ラウンジは多様な言語を使用する留学生も利用できる場であるが、日本語での会話場面が多い現状では、ラウンジを利用したりイベントやコミュニティに参加する敷居が高いと感じる留学生も多くいるだろう。実際に、現在サポーターとして活動する留学生や、ラウンジを利用する留学生は、日本語でのコミュニケーションがある程度可能な学生が多い。一方日本人学生の側に立ってみると、英語が話すことができないとラウンジを利用できない、すなわち「国際交流＝英語での交流」と認識している場合もあり、ラウンジの利用をためらう学生もいる。これは、別の視点からみると、学生たちのコミュニケーションのあり方や積極性が言語によって制限されているともいえるだろう。しかし、交流は言語を介してのみなされるものではなく、むしろ言語的不自由さを感じる場面に置かれる中で、言語以外での交流に開かれていくことが、国際という文脈における関

係構築の面白さであり醍醐味であると考えられる。したがって、今後はラウンジを多様な言語で交流できる場とするための方法を模索すること、また言語能力の不十分さによって交流そのものへの参加が憚られている現状を鑑みて、国際交流は言語交流に限られるものではなく、多様なコミュニケーションによって成立することを、学生たちに伝えていくことが必要といえるだろう。

6.3. 学生スタッフ・サポーター同士の関係構築

前述したように、現在サポーターを担う学生の多くは1, 2年生であり、低学年を中心に運営されている。特に、ラウンジボランティアの取り組みは開始してまだ1年しか経過していないため、活動を継続していく中で各学年の人数が充足することが見込まれるが、それでも、学年が上がるにつれて、所属する学部・ゼミでの活動や実習等が必然的に多くなるため、今後も1, 2年生が活動の主体となると考えられる。一方で、学生スタッフも含め、国際交流の担い手が育っていく継続的で安定した仕組みを作っていくためには、学生間での活動・経験の継承が必要不可欠である。今後は、高学年が低学年に対して、また先輩サポーターが新規サポーターに対してのモデル/メンターとなるような、縦の繋がりや構築を積極的に図っていききたい。

前述したように、本学における国際交流活動を介したピア・サポートは、まだ歴史が浅く、いまだ試行錯誤しながらの模索の段階にあり、課題も多くある。一方で、すでに得られている明確な成果もあり、何より活動を担う学生が徐々に育っている。今後は、学内組織、さらには地域との連携も念頭におきながら、ラウンジの活動の拠点や取り組みの幅を広げ、学生にとってより良い教育の機会を提供していきたい。

7. 参考文献

青木麻衣子・高橋彩 2009 「留学生サポート・デスク1年の軌跡」 『北海道大学留学生センター紀要』 13, 118-134.

- 八若壽美子 2014 「多層的ピア・サポートシステムの構築：留学生の支援の枠を超えて」 『茨城大学留学生センター紀要』 12, 41-54.
- 奇春花・石井治恵 2013 「北海道大学における留学生ピア・サポート：留学生サポート・デスクの取り組み」 『ウェブマガジン留学交流』 28, 1-7.
- 厚生労働省 2023 「地域共生社会のポータルサイト 取組事例」 『公益社団法人トレディングケア（愛知県高浜市）』.
<https://www.mhlw.go.jp/kyouseisyakaiportal/jirei/07.html> (2023年11月29日 閲覧).
- 中野武房・森川純男・高野利雄・栗原慎二・菱田準子・春日井敏之 2008 「ピア・サポート実践ガイドブック：Q&Aによるピア・サポートプログラムのすべて」 ほんの森出版.
- 日本学生支援機構 2023 「大学等における学生支援の取組状況に関する調査（令和3年度）」
https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_torikumi/icsFiles/afieldfile/2022/12/20/1_kekka_1.pdf .
(2023年11月29日 閲覧).
- 西山久子・山本力 2002 「実践的ピアサポートおよび仲間支援活動の背景と動向：ピアサポート／仲間支援活動の起源から現在まで」 『岡山大学教育実践総合センター紀要』 2, 81-93.
- 大石由起子・木戸久美子・林典子・稲永努 2007 「ピアサポート・ピアカウンセリングにおける文献展望」 『山口県立大学社会福祉学部紀要』 13, 107-121.
- 鈴木華子・船木玲 2016 「ピアサポートデスクによる留学生への予防的支援：Ask Us Desk の取り組み」 『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』 31, 183-195.
- 渡部留美・新見有紀子・末松和子・渡邊由美子 2021 「ピアサポートによる留学生支援：東北大学留学生ヘルプデスクの試み」 『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』 7, 345-355.
- 山田剛史 2010 「ピア・サポートによって拓かれる大学教育の新たな可能性」 『大学と学生 11月号』 6-15.